

## 「残障人」 中国経済新聞 081015 掲載

封建社会が長かった中国では、身体障害者を見下（くだ）す陋習が根強く、さまざまな蔑（べつ）称が広く使われ、見かけると取り囲み、はやし立てていた。

中国の改革開放以来、多くの新語が誕生する半面、差別用語が姿を消しつつある。身障者の呼称も、長年あたり前のように使われてきた「残廢人」が「残疾人」に変わってきた。パラリンピックの中国語も「残疾人奥林匹克（オリンピック）運動会」だ。

そのパラリンピックで、身障者が健常者と同じように走り、跳び、泳ぐ姿を見て、中国人は驚き、感動し、強いカルチャー。ショックを受けた。

同時に、パラリンピックで「残疾人」という単語の意味を聞いた外国選手が、「私たちは病人ではない」「不便なことはあっても、不幸ではない」と語ったことも広まった。

こうして、もっと人間の尊厳を示す呼称に改めるべきだ、との声がネットで提起されている。今のところ「残障人（障害が残る人）」が有力なようで、パラリンピックでも一部のアナウンサーがこの呼称を使い、身障者に気持ちよく受け入れられた由である。

ただ、中国の代表的国語辞典である『現代漢語詞典』は、三年前の最新版でも、「残廢人」と「残疾人」が何の注釈もないまま併記されている（日本の辞書には「旧称」とか「差別用語」と解説が付くのだが）。解せない話ではある。

中共中央と国務院は今年四月、「身障者事業の発展促進に関する意見」を発表し、治療とリハビリ、生活と福祉、教育と就業、文化とスポーツ、バリアフリー社会の構築などの方針を明示した。

また全国人民代表大会常務委員会（日本の衆議院に相当）は四月に「改正・身障者保護法」を公布して、蔑視の禁止や従業員的一定比率を確保する就業などを、いっそう明確に規定した。さらに六月には「国連の障害者の権利に関する条約」を批准して、身障者の全般的発展の保障を国際的に約束した。

公表された数字によると、中国の身障者はドイツの人口とほぼ同じ八三〇〇万人で、家族を合わせると二億六〇〇〇万人にのぼる。この人たちへの配慮は喜捨や恩恵ではなく、誰もが平等に社会活動に参画するためだ。このような人間尊重の機運の高まりは、パラリンピックが残した大いなる成果といえよう。

「残廢人」から「残疾人」へ、さらに「残障人」へ。身障者の呼称の変遷を、たかが一字の違いと言うなかれ。そこには意識の変化と社会の進歩が映されているのだから。